

町名の由来

◆二宮町神村

昔、二〇〇〇年位昔から神邑であったことから。

〔成立〕 昭和五十年一月一日

〔直前〕 大字神村

△市の南西部。都野津町の南、二宮町神主の東に位置する山間の農業集落。市内で最も早く開拓された地域で、樹枝状の谷あいには棚田がつくられているが、現在は兼業農家がほとんどで通勤者が多い。当地域の西部にある夜須神社は、式内社である。寺院に曹洞宗 長久寺がある。

◆二宮町神主

昔、神職領であったことから。

〔成立〕 昭和五十年一月一日

〔直前〕 大字神主

△市の北西部。都野津町の最南部に位置し北は日本海に臨む。町内を水尻川が北流し海岸砂丘地帯に果樹園・養豚業が成立した。現在はJR山陰本線北側の砂浜地帯が誘致工場用地・住宅地となっており、江浜工業がある。かつては、自動車学校があった。南部の青山丘陵地帯は都野津町から続く窯業団地で石州瓦の生産が多い昭和四十二年この地に国立江津総合高等学校職業訓練所が設立され、(現在のポリテクカレッジ島根)・青山中学校(現在の青陵中学校)等がある。

丘陵地帯南部の山間部は市内でも早くから開かれた所で、高野山古墳群がある。宮ノ谷にある多鳩神社は式内社で石見二の宮でもある。真言宗の古刹別当寺太宝坊は当地域の過疎化とともに荒廃したが、現在では復興をみた。ほかに曹洞宗太平寺・天理教豊本分教会がある。

△市の西部。都野津町の東、二宮町神村の北に位置する三角状の山村型農業集落。谷あいの棚田と山林がある。

◆二宮町羽代

昔、波代のあったことから。

〔成立〕 昭和五十年一月一日

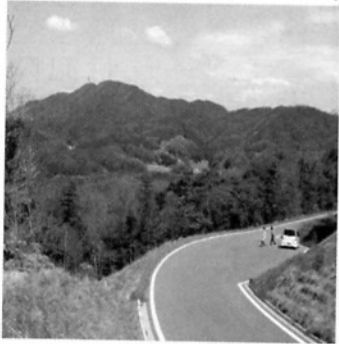
〔直前〕 大字羽代

△市の西部。都野津町の東、二宮町神村の北に位置する三角状の山村型農業集落。谷あいの棚田と山林がある。

◆二宮町飯田

昔、良田で且大炊領(宮中のご料田)の飯田村があったが明治九年頃神主と合併。

良い田、良い米が穫れることなどが



▲高野山頂上より島の星山(高角山)を望む。

◆史跡◆伝説◆民話

〔文提供〕山藤 朝之

◆鷲の宮の由来と、祭神下照姫命

旧県道神村の千田境に近い、榎埜貞博(故人)宅の上(旧県道より八〇m位左に下がった所)にあります。平成六年六月、二宮町探宝会により再建されたもので、小さいながら立派な祠になっております。この社の祭神は古事記によれば、下光比売命(シタテルヒメノミコト)或いは日本書紀で下照姫命、又は高姫命(タカヒメノミコト)、稚国玉命(ワカクニタマノミコト)などと言われていた女神で、女神でありながら国事に功績のあった神と言われ、父神大國主命、母神多紀理姫命(タキリヒメノミコト)の娘神であります。下照は「ひからびて貧なるを明るく豊かにする総称で、高姫と言われるほど高貴で上品な神様であったようです。したがって光りと熱に関係のある火の神として、採鉄、農業の神、或いは女性の神としてお使いになっていたと言います。またこの神は、高天原の天神と葦原中国の国神との国譲り問題で、天上から使者として降つて来た、天津国玉命(アマツクニタマノミコト)の長男、天稚彦命(アメノワカヒコノミコト)の妻となった神で、天上の神と地上の神が結ばれてその橋渡しの役をされた神でもあります。夫神である稚彦命は早死に



して、姫は若くして未亡人となります。

このことは「返し矢恐るべし」と言う諺にある程で、世によく知られていることですが、簡単にそのことを述べてみます。国譲りで天上の神が地上の出雲の国に、使いとしてやって来ますが、大国主命にたらし込まれて、ことになりませんので、ついに我が子の天稚彦命を使いとして、出雲の国に大切な天鹿兒弓(アメノカゴヨミ)と天羽羽矢(アメノハバヤ)を持たせて送り出します。出雲の国に降った稚彦命は、大国主の命の大歓迎を受けます。そのおり酒宴に待る下照姫命の美貌と、そして心からのもてなしに目惚れして早速、妻に欲しいと望み、大国主命も喜んで許します。二人は誠に仲睦まじく稚彦は使いの役目を忘れ、何時迄も天神に報告いたしません。天神は怒って無名雉(ムナシキギシ)に命じて様子を見させます。稚彦は雉の煩く喧しき声に腹を立て、鹿兒弓で射殺してしまいます。矢と共に帰った死んだ雉を見て、天神は立腹し矢を取って、「邪心を生じたるには、この矢に当たり死せよ」とて地上目がけて投げ捨てます。たまたま地上では新嘗祭が終わった後で、寝そべっていた稚彦の胸に当たり、稚彦は即死してしまいます。この事を後の人々が言った諺といわれています。下照姫命は大国主命が、長男の事代主命をして、石見国の治政を命じられたおり、弟神味鋤高彦根命(アシスキタカヒコネノミコト)と共に、この二宮に来られたと二宮村史にあります。特に採鉄が主目的であったようで、高彦根命も火神と言えます。いずれにしても、下界を照らして暖かく豊かに物を育てる神様であります。(採鉄にはどうしても火力が必要で)

五穀豊饒は

勿論のこと、姫はまことに美貌、美声の女らしい



(田中 俊晴・作)

神で、家内安全から女性の願望や悩み事など叶えていただく神と期待されます。(信仰次第)※古事記や日本書紀には、姫はまことに美貌の才媛と記されています。

書物によれば、この二宮では、山間部を中心にカンナ流し(砂鉄を取り出す方法)が盛んであったと言われ良質の砂鉄が取れたようだ。石見の国では邑智郡の瑞穂や日貫などと共に、有数の鉄産地であったと言われてもいます。

鶯の宮近くには、「かじゃ」「刀工ツイ重」のいた所や、金口などの地名があることから、これらに関係の深い人たちが、守護神として祀ったのではないかと思われまます。

◇貝割地蔵物語



神村の千田に近い貝割という所は、ずっと昔から魔所と言われる淋しいところであった。従って夜に通るなどは最も嫌がったものとされていた。このことに託けたか定かでないが、二宮村史によると、天文年間(一五三二〜一五五)那賀郡周布(現在の浜田市周布町)の城主、長晴の未亡人徳子(俗に大婆様)が随筆「聞くがまま」(浜田市郷土資料館蔵)で貝割の地蔵が生貝を食べる……という気味悪い物語を書いたことに始まる物語である。

注・徳子は邑智郡川本村(現在の川本町)の丸山城主、小笠原氏の出と言われている。二宮村史掲載の物語を要約すると、或る夜、

或る人がどうしても貝割の魔所を通らねばなら

ない用事が出来て、やむを得ず峠の地蔵尊に相談した。地蔵尊は「唾を肩につけて通れ」などの通力を教えてくれた。そこで或る人は地蔵尊の通力を信じて、やがて貝割の地に近づくと、此処の地蔵が錫杖を長くして、遙か清水ヶ尻(現在の神村安本屋前)の海に漬けていた。暫くして地蔵が錫杖を短くすると、杖に付着した貝がポロポロ落ちて、辺りが貝の山となった。すると地蔵は貝を貪り食う、その音がメジメジと気味悪く響く。或る人は、それを見聞して魂消驚いたが、峠の地蔵尊の通力のお蔭で足をしっかりと踏み締め大声を挙げて「なんと地蔵どん菩薩とて佛に近い身であろうが!この有様は何事ぞ!殺生は佛の重き戒めなるものを!」と締め付けた。地蔵は「ゴゴ顔」を赤らめ、生臭い手で頭を掻きながら「やっ!これはきついお叱り、なんとも申し訳のござらぬ、以後きつと悔い改める、その印に食った貝を活かして元のおりにお返しする、それで御堪え願う」とおおいお真顔になり両手をついた。「なるほどそうなる」と許してあげよう」と言いつつも一度眉に唾をつけると踏ん張った。地蔵は咽喉に指を差し入れゲップゲップと吐いて吐き抜く。出るわ出るわソロソロあたりに散らばった貝殻を身に付けて蟻の行列の如く這い出して、谷を渡り丘を越え、溝を跳び川に入り、到々元の海に帰ったという。中には貝殻を見出すことが出来ず身だけウジャウジャしているものもあり、地蔵どんはこれを見て、側にある樫の木の実を振り落とし錫杖で殻を割って与えたので、残りの剥き身の貝も樫の殻をつけてウヨウヨと海に帰ってめでたく事が済んだという。その時見落とされた貝が現在でも貝割の近くで出るといふ。私は実際に徳子の随筆を見、また読んでいないが、村史に書かれたことだ。



▲江津市二宮町神村に祀られている貝割地蔵の祠

理解したい!と思つている。この随筆に書かれたことから、この地蔵は貝割地蔵と言われるようになった。この近くを明治二十年代、道路をつける工事の際、沢山の貝殻が掘り出されたことからも実証されたことである。旧道の鶯の宮入口より更に二百mばかり上がると、道の左側に貝塚遺跡の御影石の標柱が建てられている。この標石柱の左側三十m下方に自然石で囲まれた塚がある。この塚の中央の石が貝割地蔵と言われる地蔵である。(写真参照)。標石柱右上方五十mぐらゐの地に、昭和二十年頃まで屋号、貝割という家があった。また貝割の分家や屋号カヤワリの屋敷跡も近くにあった。三家とも姓は能美を称し、南北朝期に多鳩の神領護持のため、瀬戸内より来た者といわれる。

◆烏帽子岩物語

【文提供】山藤 朝之

昔、多鳩神社が、天狗山の古瀬谷にあった頃、神社への登り道の八合目辺に、昔公家や武人が頭にした烏帽子に似た岩が、社に向かつて右手に立ち塞つている。この岩について、次のような物語がある。大昔、石見の国の治政のため、この里の天狗山に在すタマト社に、出雲の大国主神に命ぜられて子神の、事代主命が来ておられた治政の状況を親神に報告のため、随神友乃美知足(トモノミチタリ)を連れて出雲国に行かれた。

報告の結果が大変良かったので、大安心で帰途につかれた。漸くタマトの里につかれた命は、美知足に買い物など命じ、自らはタマトへの道の八合目辺りで、日暮れには間があり、春の暖かい時でもあったので、一休みされうっかり寝てしまわれた。日がとつぷりと暮れていたのに驚かれ、抜けた烏帽子を忘れて社に帰られ、またまた寝込んでしまわれた。随神美知足も少々早く里に帰ったことから、ゆつくり買物したり、知人との話に花が咲き、すっかり日が傾いているのにびつくり慌てふためきながらタマトの山に急ぎました。

深い樹々に埋もれた山道は暗く、馴れている筈の美知足も先が見えない。「大神様! 龍神様!」と呼ぶども応えなし。大神の警護役の龍神が声を聞き、この際日頃の憂さ(龍神は、いつも出雲国には行けず留守番役)を晴らしてやれと、咄嗟にそこにあつた烏帽子を頭に乘せて大神に化身し「これ美知足! 何を愚図愚図言つてゐるか! さあーこつちだ、こつちだ!」と大手を振つて呼んでおられる。その姿の大きなことに驚いたり、びつくりしたりで腰でも抜けたか、その場へたり込んだと思いきや、身体が一瞬冷んやり、ふんわりしたかと思つた時には社に着いていた。龍神がニタリ

ニタリと笑つてゐるではないか、美知足は気分がさきまらない。そこでひとしきり争いとなつた。その声に目覚めされた大神(事代主命)は、この次第をお聞きになり、大笑いされながら、「良かったのう! 龍神よ! この烏帽子を忘れていたところに返しておいてくれ! これからは里人の道標にもなろうぞ!」と言われ声も高々に笑われ喜ばれたという。後々の里人達は、この岩を道標とし、烏帽子岩と言うようになったという。

◆智恵吉の六文

【文提供】島田Eシエ・ミエ子

昔、或る金持ちの家に男の子が生まれ、智恵ある子でありますようにと智恵吉と名付けました。智恵吉は順調に成長し、やがて年頃の成年になりました。智恵吉は名に似合わず智恵がなく、皆から八文八文と言われ、親は独り息子でもあり嫁を貰わねばと心配していました。或る時、知り合いの馬喰うさんが「金もあることだしわしが一つ! 良い嫁さんを世話しよう」と言つて「丁度折り良く仏壇と馬を買つたので、見合いを兼ねて智恵吉君を寄越しなされ!」と言うので両親は喜んで智恵吉を行かすことにしました。大事な見合いだから失敗しないようにと、親は挨拶の言葉や順序などを教えることにして、先ず始めに仏壇を見てと言われるだろうから「お仏具も金でキラキラして神々しく立派な仏壇でございます」と褒め、「次は確か見合いが主だから娘さんを褒めるのだぞ」、「とてもお美しくおしとやかで立派な娘さんでございます」。「最後は馬であろうから、立髻も揃い毛並みも艶々しく立派な馬でございます!」と親は智恵吉に覚えて行くよう練習させました。智恵吉は「お父さんに教わつたように褒めて来ます!」と

「智恵吉君 待つていたぞ！ よく来てくれた！」と喜んで迎えました。馬喰さんは「座敷に上がるまでに馬を買ったので先に見てくれんかのう」と言いました。智恵吉は親に教えられた言葉を忘れないようにと思つていたので、ちよつと戸惑いもしたが智恵を出したつもりで、「立派と最後の時は馬、仏壇の時には仏壇を付けければ良いと思つて、「仏具も金でキラキラして神々しく立派な馬でございませう」と褒め、次には「仏壇を買つたので見てなはれ！」と言われて、「とてもお美しくおしとやかな立派な仏壇でございませう」と褒め、最後に馬喰さんが「見合いに呼んだ花さんだ！ 気の良くてくさくさな娘さんじゃ！」と言つて見合いをさせたところ、「立髻が揃い毛並みも艶々して立派な娘さんでございませう！」と褒めた。馬喰さんは「八文ぐらいな智恵吉だと思つていたが、いやいや六文ぐらいいじゃのう！」と言つたとか。（祖父の話より）

◇但馬の精太

【文提供】島田エンニミニ子

昔は小学校四年生で卒業なので十歳位であつた。農家に生まれた精太は、小学校を卒業すると百姓の手伝いをしていたが、親は少し他人の飯を食わせないと一人前の人間にはなれないとして、但馬の瓦屋さんに頼んで精太を預かつてもらうことにして、親が瓦屋の親方さんのところに行つたら、「親方さんの言われることを素直によく聞いて、さからわず辛抱して一人前の人間になつて帰つて来いよ！」と言つて行かせました。

瓦屋の親方が日中、精太の姿が見えないので大きな声で「精太や！ 精太や！」と呼ぶと精太が「はい」と返事をしたので「どこにおるか！」と

言う。「此処におります」と、「何をしているか！」「何もしていません」とたえる。「何もせんて良いと思うか！」と言うと「良いと思いません」とたえる。「仕事を覚えて早く一人前になるように働け！」「はい！ 仕事を覚えて早く一人前になるように働きます！」とたえる。「お前のお父ちゃんはどう言うて出したかや！」「親方さんの言われることを素直に聞いて、さからわずに辛抱して一人前になつて帰れ！」と言いました。親方は「学校は卒業してもまだ子供だのう！」と溜め息をついたと。（祖父の話より）

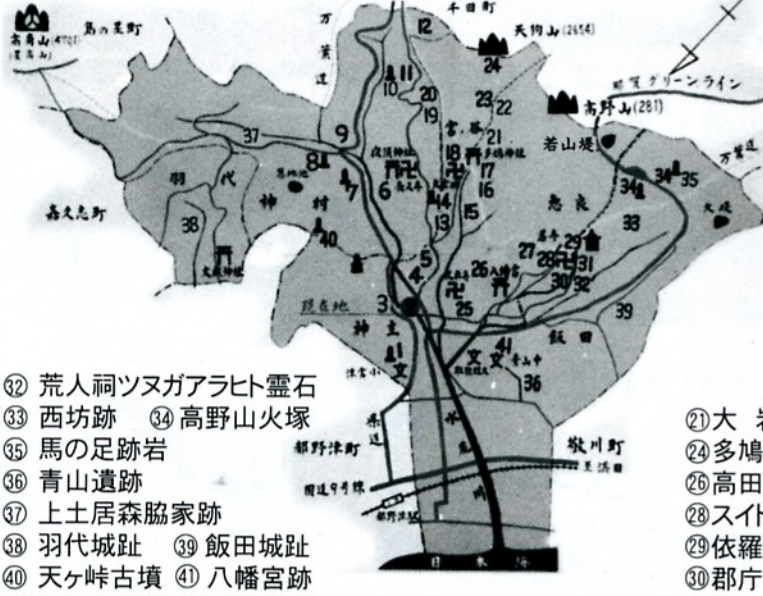
◇高野山の山賊

【文提供】本藤 幸子

昔々、高野の山に大きな石を蓋にした室があり山賊が住んでいたそう。高野山は有福越えの往還だが、日暮れると旅人は恐れて通らなかつたという。飯田村の怖いもの知らずの為さんという若者が「正体を見てやる」と言つて、日が暮れてから山道を登つたんだと、六合目も登つて行つたら、ドロドロツと赤い火が燃えていたのを見て、背中に寒気が走つたが、さてこそ正体を！と抜き足差し足で近づくと、オツタマゲて腰も抜け、声も動くことも出来ない始末、赤々と燃える火を囲んで大きな顔の青鬼が四匹もいたそう。動けぬままに目をこらして見ると、大きな里芋の葉に目鼻を開け、顔を隠し真つ赤な炎に長い火箸をさして何やら焼いている様子。あまりのその姿の恐ろしさに為さんは、オドロオドロ、ホウホウの態で帰りついたらと！ 高野山の火塚は人の近づくとくろくろではな

い！とソレッキリ口をつぐんだそう。 (古老話より)

二宮町史跡図 二宮町公民館探宝会



- ① 神主火塚
- ② 二宮村役場跡
- ③ 半田浜西遺跡
- ④ 二宮保育所跡
- ⑤ 二宮小学校跡
- ⑥ 神村小学校跡
- ⑦ 神村下野守長武公墓所
- ⑧ 山藤美濃守玄英公墓所
- ⑨ 神村城跡
- ⑩ 山藤美濃守奥方墓所
- ⑪ 貝割地藏(貝塚)
- ⑫ 東坊跡
- ⑬ 夜須神社若宮跡
- ⑭ 神主兵庫重武之墓所
- ⑮ たたら炉跡
- ⑯ 大祝部大前家跡
- ⑰ 松本坊跡
- ⑱ 松林坊跡
- ⑲ 佛教伝来伝承地
- ⑳ 万葉道跡
- ㉑ 大岩
- ㉒ 烏帽子岩
- ㉓ 多嶋神社馬場跡
- ㉔ 多嶋神社跡
- ㉕ 神主小学校跡
- ㉖ 高田城跡
- ㉗ 賀茂建角身命鴨之宮跡
- ㉘ スイコ人麿終焉伝承之地
- ㉙ 依羅娘子恵良姫生誕地
- ㉚ 郡庁、仮国庁跡
- ㉛ 角山君内磨住居跡

⑳

〔主なおき〕

- びーびー (魚)
- えんによう (随分)
- じように (余計に)
- どひようしもない (どうもない)
- きんさい (来てください)
- かけらかす (早く走る)
- ねつうに (丁寧に)
- えつと (沢山)
- みとみなー (不細工な)
- へらへーと (むやみやたらと)
- ちよこり (少し)
- ゆうな (暇な)
- きびしゃ (踵)
- だいめん (かなり)
- やるせな (気の毒な)
- えーしこうに (いい具合に)
- あんとうこんとう (あのような
このような)
- よつきやーな (沢山)
- びんびん (肩車)
- こんげん (それ限り)
- みてる (無くなる)
- えーげに (上手に)
- げさく (下品な)
- やんさい (ください)
- てこにあわん (こずる)
- たいがい (いい加減に)
- なす (返す)

- たんびに (その都度)
- かやる (倒れる)
- ねき (そば)
- みやすい (容易な)
- ちよち (見当違い)
- はんど (かめ)
- きんかいも (馬鈴薯)
- あずる (こずる)
- はみ (まむし)
- やせぎす (やせ型)
- うべる (薄める)
- とうがき (無花果)
- やれんな (困ったな)
- すばり (とげ)
- なんまんきび (とうもろこし)
- おおけな顔 (ふくれ面)
- げどう (悪い奴)
- にしくる (人に罪を負わせる)
- いたしい (むかし)
- はがいい (じれったい)
- なして (何故)
- そぼくる (そこなう)
- いなげな (おかし)
- かつがつ (ぎりぎり)
- けつかえー (案外良)
- どがあな (いか)
- しんき (たいく)
- きねり (甘柿)



みんなで明るく楽しく！
町民体育大会
3分団の
デコレーションも一役





▲ 往時の二宮小学校の回想図（森 義 範:画）昭和33年卒



● ふるさと二宮への思いを懐かしく抱く人達の声を大切に、この度有志のご理解、ご厚志、ご協力により「ふるさと二宮」の冊子を発行することができました。一人でも多くの方々に愛読され、未永く心にとめていただければ幸甚に存じます。又、郷里を離れ県外にお住まいの希望者にも進呈いたします。お申込は、下記の会社又は事務局にてお求め下さい。



▲ 神主から高角山を望む

▼ 9号線バイパスと二宮町神主の遠景



● 注文棟木造住宅 ● 鉄筋鉄骨一般建築設計施工管理 ● 補修 ● 修繕 ● 増改築 ● 改築
● 貸店舗 ● 事務所 ● アパートの貸借管理代行 ● 土地建物の売買 ● 仲介 ● 不動産コンサルタント

建設業許可 島根(特-20) 宅建業免許 島根(11)233号

株式会社 第一ホーム

代表取締役 小川 憲治 (昭和20年度卒)

本社/浜田市黒川町108-1(浜田駅前) TEL(0855)23-1520・FAX.23-1330
 江津第一ホーム 江津営業所/江津市和木町473-4(9号線沿) TEL(0855)52-3800・FAX52-2850
 三瓶取次所/第一ホーム三瓶 TEL(0855)32-2526 益田取次所/第一ホーム益田 TEL(0856)23-6000

朝日新聞・市広報誌・折込チラシ・看板

広告のご用は

◇ 企画・制作・デザイン ◇

Sekio 石央広告社

代表取締役 森 義範 (昭和33年度卒)
 〒697-0034 浜田市相生町3818番地(国道186号線沿)
 TEL & FAX.0855-22-7053

ふるさと二宮会 [事務局] 〒695-0024 島根県江津市二宮町神主1820-79
 森 義範・TEL:0855-53-3171
 ※冊子へのご意見、又は投稿をご希望の方は、事務局まで郵送ください。